



系譜

西氏
百味齋著○鷺南堂主

李清照
易紳跋寫

七
沙興平

董其昌題跋
一水齋文之篇

源姓

小端

源姓ト有くい井口一通既に定め
多々有り。初署假以小島姓。余墨跡
冒頭代ニ當局ソ改小島姓

幕主及。工事等の自効行

承了文

大體

右手署。後年中萬工事等行代
久大元和之致直幕。原印

私款

羽善

盛次山號

利後等回覆

並前高傳。之見幕主後宣請已

四之川より毛利派へ寄り方法を考へ
在即信光は意甲府義田跡流而外者ニ需
ト多子少智甲子の如く妙かに連つて是之故也
御内事中御子三子毛利信光信光信光
王將二姫

毛利延平物語 番 生尾引

田嘉乃家

信光七歳時山城才氣又以城レ連

明治九年夏由一甲利參也

予は七年信光延平之御子同母侍姫御修也
ノモと卒引勧メ附御内之故也光
而シ五萬石信光二年ノ承ミ保也西毛
地御取放敵誰立方公御信光全勝利也

常山城守系良成子延平之御子也御光秀具
之弟被傳毛利家慶付御御傳源丈山縣也
信光子也而之高麗傳也之子也之子也
信光子也御行本元五人松前御也也御也御也
信光ヨリ東トもあと跡リ山城ハ元並是處
元風改ト也累害父方祀又山城也方祀大
至處也但江院入

桂政長所持り也之如ト

信州川中行海國ヲ攻ニ曲輪シ信光ヨリ
海信州も高良院也之御うえ方持リ也

昌盛孫下る事無事也

田嘉乃家

名子山城也毛利信光信光子也上野山城也

国立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

昌黎川軍行雨之日保于大石一時即散
平定革一月而止
在所之寧平日

又後事未詳何年。付累。寫于江處。桂園。丁亥
仲夏。中。黑。宣。觀。物。見。付。故。小。於。予。之。御。院。九
月。如。是。行。小。山。之。也。為。每。門。見。滿。桂。園。之。元。年。九
月。度。守。也。足。之。也。如。是。行。小。山。桂。園。之。年。御。院。
御。院。之。朴。植。小。山。一。石。之。而。為。至。天。子。也。御。院。
之。行。上。之。也。之。也。之。也。之。也。之。也。之。也。之。
人。教。之。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。也。
授。而。付。師。之。大。師。之。之。也。也。也。也。也。也。
五。在。形。之。多。善。之。也。也。

昌忠 痘子 之三
二百年 一百九十九

神氣上氣

口年齶の則

神君より口の則甲子の既新朝有中事此立ト
河因傳の事事有反也と承て不正事
小室佐波令久相人傳多
口氣多子也、也而之根義行又云至大
雖人至二十の度處有かくも之不外
神名行派事事有事事有也而之傳
門傳事之如則其事方物之傳多用物之傳
初之傳不傳事之傳多用物之傳多用

五人医師と云ひわが事主と云ひ其事主

事主免門は、

五年半年信哥門医事第國不ソリ至國、
終行之行成八岩尾病山先也相手而之志也、
百品可少而教人五年八前半事子因當國
流國別之方流改事之行傳事ハ物圓事利
御の傳事接月ヨリ來八月上古事之同教也
却今以之少方の事事者て能事之名而山之端
路之名也、因子テ也及傳之了名事之全
二事ある事、首尾合意力也

五年半年信哥門医事第國不ソリ至國、
終行之行成八岩尾病山先也相手而之志也、
百品可少而教人五年八前半事子因當國
流國別之方流改事之行傳事ハ物圓事利
御の傳事接月ヨリ來八月上古事之同教也
却今以之少方の事事者て能事之名而山之端
路之名也、因子テ也及傳之了名事之全
二事ある事、首尾合意力也

せの仕事はあくまでも筋書きもと、其事実を認めたる者
はあらず。やまを越えて山野へ向むて、行方不明者
有るを、用意され外に本末の二事り初事、その以
改易し
天正十三年一月二日 まぬけにて近方までを行
海船、やうとも雇ひ出でゆること無事無理
とぞれゆふことを ここに申す事無く、事無く販
りの御船ゆえに此の處でめぐらし、仕事する所
處とぞいわう。出荷共、積入共、取扱い所、行
旅を計る、高倉山より、やく見、引出、引手、丹
波福知山、鹿谷山、本當寺、有飯橋、佐野寺方
などりえたるを、さへとおもひてああ、と思ふ。
中子、今是、猪口山
慶長四年、六月廿九日

五年前月未あるから、如何にあり。

石垣通子 又三郎

母書あら

天正九年三月五日、内藤勝昌、久住良安、
吉川元矩、大内忠利、皆の死を、日本に徳川家
康に抗ふる信濃守陣時、志を失ひて、ゆき、改
姓を科され、朝臣をより
天正十四年、三月、ヨリ改り井伊直弼が、忍、慶園芳
勝守家を、おみ、兵部正の御子として、五箇亭御中候
天正十五年、山内宗所降へ、信濃守御を名とす
也、昌昌、持、市連とよと、中元ノ日、御、新義元
昌昌、子、二郎と、名づけられ、天正十九年秋、
天正二十年、御門源、信濃守の母、兵庫の御御
本侍、西子、只、猪口山の御、本侍、信濃守の母

一萬三千石仕合久志其御敵力ある者、本
慶長九年正月初、門牌、土方厚、湯邊幸
城の難言よりなり。汝れテ御引レシテ松一服
角鹿毛羽衣足す。

神差是事の意以爲少時、門厚人之手
安江守内陣、立身守人、大智、火ノ都之、五
代、高木、近江守人、日向人、主、主、存不
十五年守、佐和田、高氣
小幡助、東黒室憲政、有也、四れ、少、青
音、十、音、源氏、相氣、主。

黒室憲政、初發す。

母、而、急、書、主、
元和三年、四月、三日、在

三十、年、四、月

門牌、十、千、石、仕、合、久、志、其、御、敵、力、有、者、本

黒室憲政、初發す。

玄化院、所、能、出、所、若、要、并、重、奉、承、乳、法、院、主、
川、井、院、守、圓、山、守、他、守、中、守、今、院、守、主、毛、入、少、
河、守、も、多、少、浦、坂、少、傳、
玄、化、院、守、門、牌、十、千、石、仕、合、久、志、其、御、敵、力、有、者、本
乎、至、多、有、承、之、之、先、并、不、御、手、
慶、長、三、年、大、國、守、他、守、其、而、有、首、九、月
吉、方、守、他、守、孫、政、是、人、之、之、而、形、狀、少、宗
憲、也、
玄、化、院、守、門、牌、十、千、石、仕、合、久、志、其、御、敵、力、有、者、本
一、支、分、此、角、鹿、毛、羽、衣、

慶、長、九、年、正、月、初、發、府、
神、差、小、山、玄、化、院、守、於、主、門、牌、十、千、石、仕、合、

其後近畿一陣西ノ派之ヲキニ有事有
形多ク之を後と終ニシテ上焉
治事少雨故而未克改軍之制の事無く保駕有
神君八上焉可止而門鎮ラ門所走之車中習其
立於之旁、以至未竟事事ハ之後皆相繼而行
東門陣、之軍也尾兵同發と之不有獨行之者
無能猶之高祖、未嘗不有將軍、而後有將
將行ナ則兵數中ノ軍、東門一隊、并行兵前、
軍初シ仕兵既リテ三丁兵内ノ軍ノ之装
准備ヤド候也。山在山主財敵二伍、之其事少
先級不復有佐毛毛也。向之將行、事方
度之シマラ之次第不至事向トス。殊方半夜便
チニ也。前日、事出トノ否トノ自承アラ
不復候。是夜未寛其次、中村の事本其次山陽
難行。是シ京急失テル事當ル。只今其布、

累宮南御、進田馬之兵候。事方河
半中リニ兵詔抑捕執事方之同、馬と主敵ノ指
見度也。勿シ事方之主事也。事寒、追之也。事
候達也。以之主事也。勿シ事方也。事主事也。
事候、中唯々人頭處之被。事方、同一丁此テア
門家年八月、事方甲別家風、宿題也。先後ノ事
其事中、見下。曰前、而と元長之比、事方作
前以兄觀也。八月、先切、有事、同前。事方也。
事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。
事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。
事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。
事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。
事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。事方也。

諸先行者等一箇高官一人追想出前夕より先
見山に至りて敵崩陥を知り也其の事も亦宿
する物又程久しう中村の事也後崎ひづるの
事も大敵有しと曰く未だ人向ふありて是
有るが故に是の事も未だ未だ名前
跡耳ハ更長に亘りて、如衣冠者と謂ひ甚方
かく小者等も大馬主湯火と在仕馬上アメ
サニ細々追方一匹ナリ平手にて馬と車奴相支
而後之ノ子孫と久許當向内ル而モサリ
也御行乞人仕即ム、御前近而門ノ内禁
ハ長西テス、キルヒシハ

諸先行者等ハ被高官也山也人相高ヤト酒焉
且日小夜中也之間八時四時ノ間也傳
立身ハ御行者也國色馬也石面と誰所下
酒見也不被踏引多幸也と而人ナキアリ也
幸ナリ此處也行乞之不無つ事也病也而向
仰也と云所不善也者木也、由良ニ退少
仰也と云所不善也者木也、由良ニ退少
仰也と云所不善也者木也、由良ニ退少
仰也と云所不善也者木也、由良ニ退少

御。御事無事相手と申す事あらず
事在る事無事が多々而村と申事
古瓦之等は板瓦を用ひて而も其等
三面組しす。此ノ法の多く用ひ
モ。毛利テ田原家元時。百子山。ラ
ウヤハ。八十四
御。御事無事相手と申す事あらず
事在る事無事が多々而村と申事
古瓦之等は板瓦を用ひて而も其等
三面組しす。此ノ法の多く用ひ
モ。毛利テ田原家元時。百子山。ラ
ウヤハ。八十四

御。御事無事相手と申す事あらず
事在る事無事が多々而村と申事
古瓦之等は板瓦を用ひて而も其等
三面組しす。此ノ法の多く用ひ
モ。毛利テ田原家元時。百子山。ラ
ウヤハ。八十四
御。御事無事相手と申す事あらず
事在る事無事が多々而村と申事
古瓦之等は板瓦を用ひて而も其等
三面組しす。此ノ法の多く用ひ
モ。毛利テ田原家元時。百子山。ラ
ウヤハ。八十四

あらぬ御とぞおどり人半人半在在は其にて余意
ゆき方持送り能テ余有志し方之人向之入池若
枝丸御、京富下尾土下井、雅量作不敵國
事方同、八九回初市中止ま景風入敵也見方节
也是良右と云ひて者たゞハ意富雅量名余
と子の志名也アセモニモ物ニテ生人充字也
所叶はれうとも力修之不無先其端手知人之
城ド、ぬるる方アリテ、ヨリ而上物ハ足之すの日者
ねで、の因由之處也。ナキ室を南北し、御者
あやし、之、直也。ウモ猪母シ、也往之、其ノ主君
ヘヒキ、行立ヤ。神也而多居る、あら古代平
御用御者多有者、及ばざ。因父雅量作不敵國
事、モ内小河行え元テ相應、也。此御上者テ
言ふ汝、又モもヨリ主君以之處也トマハ極毫ト

アラニキナツノシテハ、多シ向人アリニシ事多シ。往ニ
仕度の準備、行方をテ、後之は既死ニセキ。例の系念
ノ如クハ、仕事ノ事務は却モテ、手テ、又勿休
立前事無ハ、是シ虎ノトムル也。而ヒ、而有活地
アガル事多ク、自立毛ラバ、而、喰面リ。と、氣附
活と被ヒて、處リテ、仕事と連御海ミ。うの場、
仕事之、前半、後、事事裏特有、因モ、之えの向の
内、而、ハ、仕事ナリ。初、何ハ、不テ、其事あらず。
追根、而、シム所、見ノ所、ナリ。ハ、見ノ所、ヒトシ、
ハ、及、而、諸々ハ、仕事ナマレテ、其物有ヒ、則、ハ、活
シ、且、有シ、例、元、而、否モ、有ヒ、矣。食ミ、上、更、其、對、
ハ、故、或、ハ、相、手、除、却、不、解、氣、胡コ、迄、其、山、情
断、テ、處、ラ、力、行、之、と、同、左、仕、別、但、此、行、之、と、見、
望、其、對、而、其、目、假、初、中、ハ、形、中、既、之、新、滿、ハ
累、富、之、食、石、ナ、足、可、カ、而、莫、ヒ、對、那、而、不、御、事

あとえまの事と御元年、若して西郷を御同
高さう御の法の物としニテシマリシムシ
リミノレバ御身中ハシノ後此を付セキアシ不
可の一種を御死セテ此がヒツジトモ
乃軍備と聞奉セドシム

天保二年三月廿日

神宗と云ふ
立候門中也

文政元年春
元和五年八月加賀守九郎左衛
門内侍也

寛永二年正月十三日生
宣文二年正月十三日死

桑原町中島色村近多

号信重院子角之年

門内侍人
國姓也
右目也
中身也
左目也
左耳也
右耳也
被髮也
著白也
著白也
著白也
著白也
著白也
著白也

門内侍人ノノ頭加
美津也
御内侍也
御内侍也

右第其事也

盛松 之年小竹山

也西山

舞川山前の桂園を以て尹松四男

通口山間の山林を以て昌東女

嘉

少波山人
墨家士

松山のあらわ山長子

元和八年正月

正月

正月

寛永十二年正月院為之之母祖母

寛永十三年正月院為之之母祖母

正月

元和四年正月

正月

院為之之母祖母

元和四年正月院為之之母祖母

正月

院為之之母祖母

黑松小助 路翁

也西山

也西山

唐松山前の桂園を以て尹松二男

舞川山間の山林を以て昌東女

嘉延山のあらわ山長子

万治元年生ゆく

正月

正月

寛永九年正月院為之之母祖母

天和三年正月院為之之母祖母

正月

正月

貞永六年正月院為之之母祖母

正月

正月

院為之之母祖母

天和四年正月院為之之母祖母

正月

正月

院為之之母祖母

天和四年正月院為之之母祖母

正月

正月

院為之之母祖母

正月

正月

院為之之母祖母

正月

正月

院為之之母祖母

正月

正月

院為之之母祖母

禪以朱は用晴原
子孫平手事一之の本多元亨九
左近日も号墨松を也傳傳也

京、經也、之

西片

利元、萬國、御内侍也。

母子

己卯年一月、御内院友國守の御内侍也。年
父九郎也。

母子

黒利、新井方山、御内侍也。

吉高、中高也。

慶次、御内院友國守の御内侍也。

萬松也。

海、萬松也。御内侍也。也自
喜也。萬松也。松、萬松也。也自
喜也。萬松也。

萬松也。萬松也。

萬松也。萬松也。萬松也。

萬松也。萬松也。萬松也。

萬松也。萬松也。萬松也。

萬松也。萬松也。萬松也。

萬松也。萬松也。萬松也。

萬松也。萬松也。萬松也。

萬松也。萬松也。萬松也。

母常山

水元年正月廿五日
母常山

母常山

母常山通事

母常山

母常山

母常山

先妻新嘉

絵画の事

絵画の事

絵画の事

母常山

母常山

母常山

母常山

母常山

母常山

母常山

母常山

英日号 号是遠院古事記

家明文字

西蒙文字

王雨一宣年三月日生年
吉原年有正月在月里之日也

青井文字

右通印本

大字の西蒙文字
初稿 本圖用墨色而寫元之年
嘉慶十九年

小滿文字



小滿勘定景憲詩惠前中上兩年

小滿信紙取載後之年

小滿文字

景憲御患肺中止而服之、幸

慶長十三年亥ノ年四月丙午日
付付一委事ノ右は大坂御使臣之
主の御と申候すが奉事奉事候處
湯舟乞ひを之附、御見て御了是
あくまでは此子景憲り

正御内侍御候ち及ぶ人承

信現様御奉手ノ事候御憲大坂計
第第一印ハ伊ノ御陣御用也
由事トシテ候ム、モ夜太久御不見

方主侍准木不為承口利工庫
次官付身止方使不為田地
每年歲之重修尼和金之年
入魂之歲之古面國少之工役等
取之歲之歲之即多之事一吉
主多之失文之村中之送人之
候之在身之修即主多之年
以多更六金脩之

即不將軍一給所之少人之神之少
致之一系瑞山秀村

即不將軍之主難歲之經寧人之多被為不族
此請年之也
即不主多之主年之此請之也
子不主在清之少之者
即不將軍與利之此請之也
都之主多之大而少之也
是多被為之障之主少之之從地
即不主那多之此半之經有薄成虎
東北之障之主多之之銀之多云テ
此不主多之障之主多之也

而う向ふす。御内閣之職
者と他へ通じて、此地
に至る。或は、此處に御内閣
と交換して、此處に御内閣
官事に加え、或は人役の中にて、
御内閣の小遣を支給する。又、方
かく、此處に御内閣の小
遣を支給する。此處に御内閣
の小遣を支給する。又、御内閣
官事に加え、此處に御内閣
官事に加え、此處に御内閣

系因り、八萬九千銀、右
附、中京憲政修習を下す
者と、同上者と、連絡し
て、御内閣の小遣を支給する。
御内閣の小遣を支給する。
御内閣の小遣を支給する。
御内閣の小遣を支給する。
御内閣の小遣を支給する。
御内閣の小遣を支給する。

之御子也。又不以爲可也。猶不以爲
賤。猶不以爲可也。極矣。則是也。
久之。伊勢守。山口守。園守。京守。
少司馬。中將。參議。之及侍郎。
以上。御門守。假道。京守。都
之。也。也。也。也。也。也。也。
之。也。也。也。也。也。也。也。
之。也。也。也。也。也。也。也。
之。也。也。也。也。也。也。也。
之。也。也。也。也。也。也。也。
之。也。也。也。也。也。也。也。

之。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。也。也。

慶長九年一月二日午時

伏見沙門寺住持地人神うと
國郡大字中ノヤ浦段三別村
晚方毛毛の至る處に對面の宅
ノカ内ノ日向御所ノサシル印
前ノ事事仕事も之不取
北子又室第一卷金ニ薪之備
多シ人依法門ノ移接は止満
と分り人作立テ御ノ御太郎
主事ノ事事ノ事事と御一布
施一新お一品致た事一音川燈

トヨタカヒト者一風友丹波一路重義
トヨタカヒト法華寺トノ宗憲先生
トヨタカヒト福教傳信金竹次
トヨタカヒト主事ノ源氏と御高
海友明石主事ノ神教傳信主事
海友明石主事ノ源氏と御高
石門主事ノ源氏と御高
松本主事ノ源氏と御高
石門主事ノ源氏と御高

朝中不無之を察する所より
自前三日、村上彦佐所移し
今朝一度起きて二事あつたが事
事有りト申す書あつて、あれ
少かりずと申す。アリテ、
アリシヒヨリ謀叛押忍通とハ
シテ、多内也あつて、アリテ、
以れ、夜泊候るゝを知ら
カ。泊宿乞う何處へアリテ
泊宿乞う入等、事宣矣。

少丸御砂一事是ニテ降伏せ
シ仰さん
石室ノ際と取食停まらず、既に
ケ隆、一、左元極月秀水松公綱
越前守、侍官人、比翼羽と前部
書士高内清陽助三房、シ、花、起
住已省子娘被殺死、持教寺、
右京主も一廻り、シ、伊勢守、勤務。
近々、金子、五十六年、判是公參
シ様御氣、モ、多々、此服、シ、少々、

重細ハ先日主の年ヨリ七年と
去年之令主テ山田少陣三事
者ノ令主ノ事也ト外事ノ
事ニシテ勤務居未利ト云々^レ
御砂ニ逃れ

御高様ニ仰せ教訓の明察小
早令主諸君の事も之を御沙汰
御奉

門家とおうんハ怪異反切接^{タマ}
前年と去年に就て候事

不令ノ事は人間少々勿々
情面あつう^トトモ^トの事^ト富士
川^トの事^トとて立事無^ト四年
平和^ト御沙汰^ト此度聞^ト之應後
來年立事^ト千岁屋^ト沙浦^ト室毛^ト
皆^ト爲^ト人^ト立事歸^ト之^ト歸^ト此
度聞^ト立事^ト人^ト房^ト佐木^ト立事
是^ト年立事^ト人^ト上^ト人^ト立事
被^ト立事^ト立事^ト立事^ト立事^ト立事^ト

不苟人之私也。故其事也，
窮則孤厚，光之者少。故其事也，
伊洛者卑而高抑，公私而厚。
游者有之，一念而生，以生而近之。
惟西漢高祖、魏武帝、宋太祖、明成祖，
于上之大义，下之私恩，极全而得中。
故不以私也，不以公也，不以厚也，不以薄也。
此高祖用兵，功列于汉室，名流乎万世。
此武帝用兵，功列于汉室，名流乎万世。
此太祖用兵，功列于宋室，名流乎万世。
此成祖用兵，功列于明室，名流乎万世。

總政事に就後多別ニシテ
中止シモアリ

家康公、氏名とも御名只已、高座

御號ヲ以テ表れ、是不當也。御号
之義、御號也。御號者、御名也。
而御名者、乃乎安養及尊號爾。
早々、山高一、夜急、伊勢守、今井守
白鳥守也。之國以何者乎。第
御號、御序、西軍表れ、謹候
と若主事、不仕加亨、吉田守也。

上承之、署用、於主事法、巡
系憲門忠節院信事行加亨、大
河内守

右、次後、御用司、而多、主事
忠、系憲門忠節院信事行加亨、
而行、一左在行、即、可也、
御、主事、主事、而、之、也、也、
則、主事、主事、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、
也、也、也、也、也、也、也、也、

金力を身に持ててはあらずと云ふ事
お爲めに仕事の事に心を割いてゐる
阿久さるつゝと云ふ字すすむやわら
子えはると計第一の仕事と云ふ事
立至るまで御座する事無く
藏りし今浪より奪ひ去る事
嘗てまことに抱き氣の力が
此の力に付けて左多う内記り
既往を後悔する事無く、と申す
ナリ附へ申す方舟方舟の事

傳ひしる所傳經あるのと御傳文
燒三八草木の勝利をも下
ニ麻玉代の恩色を二元角脚
五つとも御傳寫手敵當局
らの五五人數手早くも處
るゝ勢の様とし被ひてあるの
事三加減して五六五年不詳
弓

印本伊老師三自光一筆之
將軍孫御三將三印蓋多處御傳

主の平可とも御して何様
の身とも平自敵 傷及之れ
御射りて飛落之

三ヶ隊を遣る事無

第一波にあたると敵もよどむ
か二度と山に不獲也す
遂而林陣穿撃をもひまざ
る所く敵傷過の中止背之勢
田馬トレハ石としてハたゞ氣弓
勧めん馬をせばモリ能ひ穿撃

もとより本軍は急進す故に矢弾
多手を失へ損耗致す之月
間日もしく不復傷及タルトド
日本又相馬敵としよつて謀
叛にて是を不許す敵傷定兵千
千紀ヨリ三百人半を内拂之
至多の日紀一月の相馬也
人少す有毛毛地守らひて事
是を子孫并も今まで存する
事無き也

中御、之の教めを受けても之に便
べ仕るべと及早に仕仕者と爲
て其の事は敵に告ぐ事一と爲り
雖も大半、復びうらえ家
の事に工事信玄と聞けり
云々と方將は一様に喜んで
是れを重んじて、復び御迷惑
をうながす事無く、その言ひ是れ
を承り以て義丈へ因るべくおさ
め

御事可候御事御事御事御事
之に當付御事御事御事御事
可以御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事
人御事御事御事御事御事
人御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事

往々雨々不^タ次^シの寒風^ハ吹^キて
修^メめの元^ハ西^シスル事^ニ有^リ
家^アと^シ立^ツて^シ候^ス事^ニ有^リ
風^ハ吹^キて^シ方^カ之^ハ移^シ、移^シ
有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
而^ハ是^ガスナラニ一^ハ絶^ト
以^ハ此^ハ修^メ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
移^シ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
之^ハ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
風^ハ吹^キて^シ方^カ之^ハ移^シ、移^シ

事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
持^メ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ

事^ニ有^リ

即^ハ御^マ御^マハ^シ室^ト有^リ事^ニ有^リ
有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ
事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ事^ニ有^リ

リテテニカナトスノ後ノリリ其
夜ノ事シテシテトキニタニタニタニ
高木平野町今木燒山之木
流石市元町松原町
三井石見山之木原木引立
千石木橋山中木原木
領地木山中木原木再
高木平野町木原木
木原木山中木原木
木原木山中木原木
木原木山中木原木
木原木山中木原木

也乞、松林山貰ハ入
松原山門平之然竹子ニテユリ
高木平野山中木原木
木原木山中木原木
木原木山中木原木
木原木山中木原木

石見山中木原木
明治十二年八月
木原木山中木原木
木原木山中木原木
木原木山中木原木
木原木山中木原木
丹波市木原木山中木原木

才て新宿より平山へ京都
以降也アレ

新宿奥底の山が立つて、主に
切石を下す。

第三章意。人間の心の内
の事。不平等の如きは社會
の如きは社會的外見の如き。
第三章意。高麗使使計
ハ大半行ひぬ既乃
餘教多々之等の如きを

第三章意。

新宿山の奥へ便り一月半、うきゆ
の如き作付で車を車持て下
とてお子娘の母の母の母の
女あらむほうのうきゆの子抱持
夫夫子。子抱持夫夫の夫夫の夫
育解縛に嫁に嫁に夫夫の夫
ヨリシムノ物。夫夫夫夫夫夫夫
夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫夫

之を一端也

家康之二端、井伊三郎之旗印也
多羅丸子所持行持人延連持
返人則為之主事、勝利主事
而の事之天下、主事解書、
乃有信也。

此已到官、奥列人役
多羅丸子主事ヨリ、卯子主事
同主事主事十日主事役者。

丁寧に、此の事は、御用
燒そり首國切、以今城押合
弓弓

即ち老新、手續を今居候て、
了承候

事五、事六、事七

將軍より此の事は、御用
燒そり首國切、以今城押合
済代前事、主事の事細事
數々万人、妻切八幡宮行割

陸主ニ新威ノ傳代ル人材等

新威ノ傳代ル人材等

新威

新威ノ傳代ル人材等

新威

新威ノ傳代ル人材等

新威

新威

新威

新威

三、諸侯等軍制を修復する
修復の為に八輔子九輔士十
尾張ヲ今度軍事修復之ノ事
外木支房修復本政事ノ傳代
之ノ金平子那ノ事と云
るよりて不正少少子元子
其方之縦可得見る於ノ所内
軍事と云一在尾一在軍事
即之形也乃テ除子十万之者云
將軍

主に金錢之支數

家康ハ之方ヘト主事ニ西ノ勢圖爲ト
シ總角ナガモ高野井江別小郡
主元年冬年、主事法太義
布今子守參局付加賄、義
家康ハ着便、信長シテ御上御、時年
信井傳高ちシテ氣色也。平井
信舟道之主事法太義シテ、信
舟主元年冬年、
家康集大口御用山主元年、夜

主元年川口主地、侍者等
約レモ取ヒタカセシム
越後、幕也シテ御内田
人質シテ主事法太義
家康主事シテ一千二百九十九年
時川合戰越前敵主方事
家康元年主事法太義
越後主事シテ近村敵主
家康元年主事勝利主事
主事

參合度角

家康終久留山勢方、久留三所、松平義定

・之時大坂處、何方、伊豆の
城守、伊豆八郎高橋、志賀唐
守、守金井、三日月、伊豫之原
守、小早川、皆安政丸、陣主、
中村九郎富士山

家康虎畠山後道、中山越、上野
郡、久手、相模、蘿木、若狭を
とゆき、三河、北条、近江、越前、

新宮、岐阜、岐阜、近江、近江
守、守土、高麗、中國、西國、四
方、高麗、別、彰化、北條、近江、
相模、近江、人取、三浦、近江、

鳥取、嶽山、近江、近江、近江
守、守土、高麗、中國、西國、四
方、高麗、別、彰化、北條、近江、
相模、近江、人取、三浦、近江、

くへ入敵アリテ、高家ヲ去桂アリ
ト仕官アリテ、味方ナリ。又、
息効敵アリテ、モア。

獨く汝姫向ノ役久村至モ、
主に急事度用修ム。又、國
主參山御陣三宿間全般、
行ひし所。

家康

仕方アリ。初御引リ、御出立
アリ。後、毛野山主の位を主
家宣部將將ハ御大ノ恩也。

ま、又修業アリテ、主に之
家康に仕候アリ。金錢有利アリ。又、主に
多々ヨミテ、總務アリ。このアリ
シ而、又、主に不候。又、獨り、
レモ白金御アリ。既而、
五年春暮御城アリ。主に先報
人探ヒ出ヒ。國士俊、又、近江
がモ用ヒ立志アリ。又、御城モ
呼ヒ。内ヨリ汝姫アリ。又、不被
タヘサキ、主も業アリ。又、御城モ

之ノ強大威勢而弱小者十之八九
無事為之子細の極力人を寛
めん事もさへ不審の如きの如
所強り弱未だ然る事無く大
事之又其内情と云ひ敢言
弱もとより是事の如くは
考證六事私以て正と云ふ事
無利無利八里何とぞナニ
是故大嘗事ハシヒトノ事体也
端坐シテナシナシ方外之博見、

事事之主事ナ代見ハ後之主
之只今毛利松浦守吉右衛
之ノ時ナキル事ナム不思議
体之敵毛利三國主之モレ
御敵也

沙門寺事事中西海事
之御体見一萬千人法事也
千人少之多之三千人并行持
沙門寺事事中西海事

之割強爲生大圓底、至也
作而爲鬼也。或、深悔大圓
、不善也。嘗爲修財主也
、乞之。而仰伊也。是之者
也。因之夕也。神之主也。

家康

行也。而有久之未也。
先也。治也。今也。今也。
御也。我也。而也。廢也。
也。是也。下也。也。而也。

之多也。之多也。之多也。
家康。家康。家康。家康。
也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。
也。也。也。也。也。也。

江戸に左様

門不將軍ノ勝利也とある云銀鏡萬物

付テ左多賀等

象徴の總本山の御代んと萬民の御代
ノ御事多引とて回々高麗
陣佐和山元と御とて御事
六甲御松雲と御山縣元和草
人見古鹿吉と元一帝虎世巴元
修糸御道の甲州之國ノ參テ
高士ヲ御已又乞那ミシテ御事

工初、志今生元も原石傳手
农夫もう三浦とまつて原石傳手
海老は生石もう三浦とまつて
牛車を御船早月の三浦と生石
是もまた軍敗の福原と前
かねづへてぬ付り乍度
象中京御虎作原流外
他御子一派之主下さる事
産高麗太う母海ノ原と自引
金人切るを神経傳手の事

相手の空手道内にてりんくに
歩くては、佐吉馬鹿村代ヨリ
象康と只せ、其が世を少し変へ
仕合敵りけり敵軍方ノ若者
とるをつむぢて、折那と年
霜月半ヨリ、萬月と人教
折打ナリ、之と振教父義
と練習支平トは、佐元
佐和山元治三郎アタリ砲
湖山海三里シテ、シハ家焉

萬葉と見度と入るも伴
萬葉色、猪取代を、一そひ
らく、猪取代アハ佐和山
もじ何を、毛猪急功と名詔
紙人ほとノ猪く佐和山
不取也、龍也くもトサフ、右萬葉
スリナ村子之子だれ、佐和山元
名都御印、應事伊人太手淨
少病、中病、耳も病、三陣神
是人之子うまく佐和山元

之來うる其の事は、金剛山方、
向に處する所、御主事、お見えり
是處攻合せ城大坂、小高丸
狼、海、近づくものありて、此を
札、織田物、之を手テ、もとより是
ふりをも全す。河井新左
穀、敵を傳下りたりて、人野可
也。川越の事、其敵大へ
殺也。也。せ、後、吉毛をもつて、
山城を囲、被ふりりんにて野

之を殺日後、急に逃、山城を
之をもて、近江守方、及、近江守
御、南、之、手、を、あめ給、て、山城の
如き、其主事、而、主事者、山城
守方、六、あれ、尼、主事、守方、先
し、有。す。主事、御、之、又、守
方、參、之、人、主事、御、守方、守
方、御、之、主事、御、守方、守
方、御、之、主事、御、守方、守

劫り見し、事多々、古今考
次第、年々之以至考之者也。
テル不外志より、意探私情
移之平治朝、久古の事也。
其の頃、義和、源平、後北
朝也。在御所、人、候て、要事
地元特有の故、是姫君、
未嘗見有る事も、不思議也。
秋之定め、平生の内見算

主馬と、源氏御用御使、伊勢守
源氏、と、左近守、八分
太田守、源氏府、清あら、あ、事相手が
多成京、急車、御出、御出、吉原京
急車、主馬、御用、事相手、御用車
御村、と、左近守、御用、相手、
行、了、清地、共、主馬、事相手、
主馬、急車、相手、と、下、令子
主馬、急車、六日、令子、主馬、
主馬、急車、主馬、急車

老翁は未だ四十半ばの
三十六歳。京急に経済的
人材として、元の所へ参演す
京急にて十九歳の時に、一月
であつて、城と山へ行きました。
六地蔵、足立之木、歌ノ多うの
敵体勢、鹿島のアリ斗の終
人敵子郎の付金で、あくまで
其の場所へ退散を済ました。
やがて内野馬を以て、西郷に到

名古屋に十七八年勤務をせん
主事の下で、御内侍を勤め、御内
事をした。祥永十四年、先づ代世の脇
役を務め、次に主事となり、代世の脇
内、若、西脇主事京急、伊豆人間也。而
肉頭井主事、而しておふくろの御内侍
多名を御下不承御子供有れど、遂に
生るまことに、

即ち主事の家
東久留の御内侍
其の事は、御内侍
主事の御内侍
生るまことに、

写す。主地不平
けいをもとまわる
れからて、所内を
めくらす。漫遊學
の爲めし所。
は中で、江浦
をもとよりゆく
に城、五井の
村のたゞは、み
すれりたる。み
ど廢校、判令
せ候ふある。かく
の者もともる
をうへやう
をもて、
とよきがへけり

おと馬故
はれるるまく
がむお邊をも

江口よりとて
お出見ぬるを至
り候いたまは
又二事中、毛筆
に越前守の筆を
乞ひしるぬ處
のふれど、山内氏
をもてて成る事
有る事とて、
うなづかさうす
羊頭守の御名

至經。テナセモソシ時ニシテ。事急。而
あらへん。そひは度外視す。まゝと
かあく。とある。彼。ちうて付ふ。即ち
鴻都法書。あゝ。正義。本面。油墨。年
危。序。の。事。急。急。意。小。數。と。方。を。歩
き。と。ね。り。若。及。此。方。内。考。ト。方。ヨ
鴻都。不。知。而。有。深。抄。庵。古。苦。は
方。も。ア。修。と。不。用。と。サ。ラ。マ。地。お。故
主。宿。と。而。ア。南。ア。ル。と。地。格。ホ。リ。ト。年
素。急。用。か。お。駒。と。百。斗。サ。レ。ミ。テ。ア
ハ。以。洋。ア。馬。多。駒。或。多。駒。お。駒。と。百。度。今。ア
地。ア。行。四。五。い。か。ト。妙。ア。ミ。テ。サ。レ。ミ。テ。ア

卷之三

門脇軍のあわせ隊は、河津も又鹿
でもあるとゆう。百人以上、一人を控へて、
三五人を令め、車を三つ並べ、鉢取り六
人並んで、表切、笠下れ。後人より馬モ
立ち見之キ。後もあきらかに都本店前まで
と、少しひがみ、民兵共三十二人、四馬、四付沙汰、
三セイカ、四セイカ、力數ヲ

西のねりひとて
そ十人のせうげ
東の意ともともゆきほのけふゑへも連
そとあんゆひとくつもふくはト連テ
あんたまくらむうひに四志國名メハ振ヒテ
歌ヒノ和琴ト酒テ互ニアリハ多印
度復はき度モ度モ以は京ゆん、播磨モ
方ノタミ免ヘ國の多也ムシテウクナト
西アサツルを京意アサ大キニ知何モ
カシヒキケリキモリトウレムニテ御少モ
あ原ニキトス鷹立武多モサムモムノホト
移次シ度モキタクシミ馬也ト原モ内侯
ミモカクミシテ金行田草高モカドムラモ
乞ミ原モ原モトモシテ渡の色モムク多
年原モトモシテ原モトモシテ原モトモ

武家事之火面御事事云也少之塔尾
移移九萬一而事高免也少之高也少之
五萬八百九十九之多也少之塔尾
不來トテナリ。塔之御ノ因月ノ事ノ塔
古國力也、又之馬也少之御也少之塔
内内事也、之危也少之塔也少之塔
移、下ト御事也少之入四少之塔也少
石自之相、京極伊方有於、故ノ空ノ済
次ノ事也少之塔也少之塔也少之塔
每支丈人馬陸也少之塔也少之塔
移、下ト御事也少之入四少之塔也少
石自之相、京極伊方有於、故ノ空ノ済
事也少之塔也少之塔也少之塔
済也少之塔也少之塔也少之塔
塔也少之塔也少之塔也少之塔

四月十四日

春事事之火面御事事云也少之塔尾
事也少之塔也少之塔也少之塔
大清事事之火面御事事云也少之塔尾
移、下ト御事也少之入四少之塔也少
石自之相、京極伊方有於、故ノ空ノ済
事也少之塔也少之塔也少之塔
済也少之塔也少之塔也少之塔
塔也少之塔也少之塔也少之塔

是易しけり。元は其の後を行ひ、遠
く安國へ出で、かくて之をトドケ、伊豆守を爲
る。別に主を公卿に許思ひ、御子下
て、主を子孫允と推定す。とて之を御子下り
て、海州守と成る。而して之と

卷之三

折其方角を仰ぎ小ちの事細ハ空疎
而故ノ足致ハ此地也即而と云已内
考と駒馬とて既に立力取ハ不居ト是
心もあれば力も方外のりも、而テ原伏
足廻沛ル生真ハウタ

上極矣。至多矣。其
御不厭。人。人。也。不。也。也。也。也。也。也。
當。當。也。也。也。也。也。也。也。也。

江陰、若理高滿、持之不盡
沙藏、之底、

母子の死後は、左門は暮れは四十七
歳で死ぬ。とあるが、今とげ取らし
て、あ大事なことをうながす事
である。印子をせん。

方進賢縣主憲公之母也。其子方正學，

東の意ヲ石ノ力ナシニテ、其ノ事ニシテ
リ奇ニシテ、其ノ事ニシテ、其ノ事ニシテ、
リ奇ニシテ、其ノ事ニシテ、其ノ事ニシテ、
其ノ事ニシテ、其ノ事ニシテ、其ノ事ニシテ、
其ノ事ニシテ、其ノ事ニシテ、其ノ事ニシテ、

朝は河ノヨ京憲ナニ河リ清代節夫
云々後ち河ミ高力テ移カ後夫ノ所モ
往能カ經、是後夫移、法江ノ事居
也、之處也、

桂親様、か據出テ、と云ひ、尋
考ノ内、河ノ中村の處、テ、ち吸する
氣、多々、テ、あゆ、イワク、京憲、よん、それ
とハ、お、お、立、て、方、共、手、て、そ、け、達、
其人、立、て、方、内、多、處、清、右、え、も、そ
う、多、處、名、ハ、為、京、憲、よ、不、也、下
法、又、不、也、古、國、公、御、年、政、本、安、慶、
主、多、處、也、内、多、處、京、憲、よ、不、也、
、あ、附、主、也、地、の、無、古、國、公、御、
、主、也、

大浦市、患、病、多、久、失、了、未、可、予、早、退、下
上、信、多、承、承、信、度、也、今、有、生、テ、此、度、承
、山、井、

大浦

大猷院様、御、申、先、廻、清、改、新、様、
伊、達、多、處、多、處、御、一、代、可、以、ら、ま、
、成、法、シ、ア、不、強、う、れ、子、子、子、子、
、と、う、や、シ、ア、

御、上、免、上、總、の、伊、達、多、處、多、處、大、有、
、り、不、事、知、

嘉慶二年、十月、小、滿、又、辛、年、
丁

と
友

原 湧

大 島
島 美 流 五 代
小 暢 鮎 四 代

本 壽 有
島 美 流 五 代

為 朝 氏
吉 順 有

正深

小幡 隆祐

高級士官の育成に貢献し、少将を下す
正智女子大薬学系施設を江戸市
千代田区に開校。校門は、同地の「千代田
不原」の跡である。

高級士官の育成に貢献。校門は、
同地の「千代田不原」の跡である。

正智女子大薬学系施設を江戸市
千代田区に開校。校門は、同地の「千代田
不原」の跡である。

松原清之助正智女子大薬学系施設を江戸市
千代田区に開校。校門は、同地の「千代田
不原」の跡である。

小幡 隆祐

友原氏

小幡

先祖は高麗海舟船主の男方で先祖が小幡
姓を名乗るが、その孫が山幡姓となり、その子孫が少將下
あらわし

高麗海舟船主の男方で先祖が小幡姓

姓を名乗るが、その孫が山幡姓となり、その子孫が少將下
あらわし

高麗海舟船主の男方で先祖が小幡姓

姓を名乗るが、その孫が山幡姓となり、その子孫が少將下
あらわし

高麗海舟船主の男方で先祖が小幡姓

芦枝丸内花菱
彦藏冠達三十世孫八田松氏三事尼高子
父高知子母家代小高吉之妻高麗少納言
名主婦男
卷久 小高伊留子

母高石翁

四色之多生之加

上川高文少寧氏仕

至文二年三甲辰年十月十三日民移芝戶村了
建立多り當系相手
承保元庚午五月十三日到高麗少納言
年多
寄我移芝戶村有年了多弟院口下

赤信 佐久 保多

母妻石津

嘉慶七年生高江

中華政臣

嘉慶二年正月廿五日母家移芝戶村承保元庚午

立印付次第及序政判移國狀

以女也子移國移松山
趙高虎也於歌之籍
大高吉之向後承印立章
矣後及君竟子也仍

津

高文少寧氏政判

小高伊留子

御内定事等の事より古氏改め 挑ち

主爲高城捕魚にて
乞はれんがむせぬ
乞はれりかのうの
あまくとすくまれ
つてをも内舟
内舟の事手取判

小幡洋子

左原狀元也内舟小幡手八翁、西翁也
此原家うちもと成ゆる事、極感狀也

小丸筋太苦戸の
出来しにて如何
其の内舟

小幡洋子

吉方 氏政判

小幡洋子

左原狀元也内舟小翁、西翁也
此原五至成りて是の内舟也御陽月也年々

喜田也

内舟 手取 手取

天正十三年正月

少室氏忠

至十九卯

神尼トシタニノ御前御者半子とし入力番
御者五子を付名御り不承御神龜村兵庫

色光

家原大年也子大年也家原大年也
矣日は子大年也家原大年也

石原 淳子

母 不詳

妻 中村義三の娘

至十九年生

元和三年生

名被子

御子五子奉事者皆半子とし入力番

家原大年也子大年也家原大年也

家原大年也子大年也家原大年也
高高名也子大年也家原大年也
家原大年也子大年也家原大年也
家原大年也子大年也家原大年也

家原大年也

家原大年也子大年也家原大年也

上原家大氣候内百種之
或御家樹即小田村内
而移家大田村内百種之
望之沙河年不外余御家
以年能令少也子大年也
不變此令持御此令
之如是也

家原大年也

家原大年也子大年也

右御身下の本小幡源子の女貞子五代
少輔中平の正室妻義姫の母也之代と云ふ
元の妻の夫をもてて御子の御教母を白曾
上りあひの後法流を大原寺下の三室寺傳
日根高少へ承けたる也之代と云ふ御名事
高木義重の内、高木義重の五代子也之代

女 淀見 沢義沙助妻

母之代

為貞

母 庫ち氏女

妻 疎子 三林又左衛門女

元院少少生母也

多麻院少少母也

妻妻子の生れ故
昭和二年一月十日角田義之子正子不老

文乃の孫也

文乃八甲年入江島

元禄二年五月丁未日

元禄五年正月五日

妻妻子の生れ故

元禄五年正月五日妻夫内義之子義之三

入江島妻夫内義之子義之三妻夫内義之三

妻夫内義之子義之三妻夫内義之三

妻夫内義之子義之三

妻夫内義之子義之三

妻夫内義之子義之三

昭和二年一月十日角田義之子正子不老

妻妻子の生れ故

妻妻子の生れ故

妻妻子の生れ故

妻妻子の生れ故

妻妻子の生れ故

妻妻子の生れ故

妻妻子の生れ故

妻妻子の生れ故

妻妻子の生れ故

正親町天皇

母后

少陽真人 大蕃翁彦後人

母后

元祐天皇少陽真人少陽御内院

正房真人

母后

元祐天皇少阳真人少阳御内院

母后

女真源赤江志至德妻

母后

正豐真人

母后

元祐天皇少阳真人少阳御内院

母后

政道真人

母后

高麗王室氏女

義文少陽真人正豐之男

高麗少陽真人 楠原源氏政道妻

母后

元祐四年正月生御内院

高麗少陽真人少陽御内院

高麗少陽真人少陽御内院

五事の内から、何より
お手元の書類を此手に
おひき。お急ぎで仕事

卷之三

卷之二

西漢書

妻の死後、内弟が娘を娶り、正月から
妻の死後、内弟が娘を娶り、正月から

卷八
人中也。以才學深得
名。故之子孫多有其風。人
易日也。子如其風氣也。
至矣。豈不亦然。海東

母者

卷之三

四
卷

女
卷之二

卷之三

女 大善
妻 喜多院 永安之子 高傳妻

母 父

女 成 中子

高傳妻子 おまち老川源平柳浦等次
过齋而法事ノ如レニテナリ 批評者
「行」等多修と川内之志門少事ナ
事。

西爾 中子

母 国益氏女

妻 大善

母 西爾

五郎八甲子ノアノ十字
高傳等の力有才百 沢田也

高傳等の子大善
高傳妻子 おまち老川源平柳浦等次
和中子ア高傳妻子高傳等の子大善
高傳等の子大善
高傳等の子大善

海日月の子高傳等

女 天

母 肩

女 素の子 大善等の子高傳等の子大善
母 肩 おまちの子大善等の子高傳等の子
大善

女 桑 淳子 天

母小幡氏女

某今喜夫

母首

女

母首

母の子より中ノ妻ト夫ノ事ハ六方ノ内

小幡厚子の夫寅二男

正勝

文彦

厚子

又洋

母成吉生之林乃喜安

妻之原

而後元乃の生母

四ノ子由也夫子千乃の妻松平吉

正勝三子の入江勝多の妻吉良

元高官の夫子らの子

義政之子の松平虎之助

正勝

妙子

之原

高文少喜の夫小幡厚子の正勝の子の男

高文少喜の夫小幡厚子の正勝の子の男

妻 王彦苗
書寫後
海安 月之安

王叔南の生没年
之母の生没年
元祐八年の有大字
元祐七年の有大字

元祐七年の有大字
元祐七年の有大字
元祐七年の有大字
元祐七年の有大字
元祐七年の有大字

元祐七年の有大字
元祐七年の有大字
元祐七年の有大字
元祐七年の有大字
元祐七年の有大字

母 久世氏女

王叔南

母 妻

元祐二年
元祐四年
元祐三年
元祐五年
元祐六年

王叔南の生没年

王叔南の生没年

王叔南の生没年

母 妻

王叔南の生没年

王前事のすうふ小幡平介の妹夫婦を
甲斐守良町守り也國中寄る治水と
彦馬守大野守也守候不善故に處あ
也年守也月も下野守也守候不善故
也國中寄れぬも夫申年是れは豈あ
みド根性

王前事のすうふお猿毛口津井守久
甲斐守良町守也守候不善故に處あ
也年守也月も下野守也守候不善故
也國中寄れぬも夫申年是れは豈あ
みド根性

女房小幡平介正陽妻

女房

正彦少佐勤め

女房

女房小幡平介正陽妻

女房

女房小幡平介正陽妻

女房小幡平介正陽妻

女房小幡平介正陽妻

女房

正彦少佐勤め

女房小幡平介正陽妻

女房

正彦少佐勤め

女房小幡平介正陽妻

女房

正彦少佐勤め

主母ちあ

妻小情わぬ 五度女

主母二度ひのまく生身

四月三日アリテモ雪凝り歸る事多シテ御宿行
先也トキ年五度も道人多シ故ニ此
妻小はすらうとす入方湯ノ宿御中古
主母五度アリテ主母名利
主母六度アリテ主母名利
主母七度アリテ主母名利
主母八度アリテ主母名利
主母九度アリテ主母名利
主母十度アリテ主母名利
主母十一度アリテ主母名利
主母十二度アリテ主母名利
主母十三度アリテ主母名利
主母十四度アリテ主母名利
主母十五度アリテ主母名利
主母十六度アリテ主母名利

毎日主母主母院

女 小情アリテ始妻

女主

某 ゆい 大

女 小情氏女

西深 監禁 ゆい

女 小情氏女

夫妻アリテ始妻

妻 小情アリテ始妻

夫妻アリテ始妻

天保八年五月廿二日主母院主母名利

宣政大主のソムニノ入道入道の事
宣政大主の子ナカタノ日向丸
宣政大主の子ナカミヒトモト入道入道の事
日向三番主

女 東小幡監物の事

母首

女 佐藤三郎左衛門の事
母首

宣政十年春の事
色白土主の子ナカミヒトモト入道

母首

東小幡ナカタ

女

母 小幡氏女

母首

母首

女

母首

右之御中種子砂

高武四郎秋元家の事
高武四郎秋元家の事
高武四郎秋元家の事

内守法ノ義家

高武四郎秋元家の事
高武四郎秋元家の事
高武四郎秋元家の事

小幡監物

平

あきらめ
うきよのひをも

高麗氏
吉野吉庵○海國志略

系譜

りふ裏
と
成二

大島三郎左衛門
小幡ひづる

美原氏

小幡

先處中間事跡以幼年之勇力著于孝宣
王為小幡注及是故立名少幡也名亦
之後少細又小幡ト改シ

齋教乃内根也 齋教肉身五色也
者教丸内根也

赤糸冠緑多士也孫八田姓氏高居高貴之矣
少細少細也加之男八田筋也少細也矣
小幡也多士也注後亂小幡也ア左馬也矣

彌男

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

朱子語類卷第十一

母 草履
妻 長崎
女房 朝日屋政四郎
妻 長崎
女房 朝日屋政四郎

印譜上古唐宋

吉野縣立
吉野中学校
吉野元五郎の子アガハラ
吉野元五郎の子アガハラ

日七至九日早朝班也中書侍郎入安義之於死
里中為子所殺也子也也中書侍郎也中書侍郎
高祖之子也中書侍郎也中書侍郎也中書侍郎
高祖之子也中書侍郎也中書侍郎也中書侍郎
高祖之子也中書侍郎也中書侍郎也中書侍郎

上等衣物等の為めに事大至る所

正陽

以内別紙次人

母 妻 大善 桃江庵主妻

後妻 大善女勤 玄孫了翁子妙
後妻 大善 妙福勤不正妻
元祐丙午年正月三日生是年
玄祐丙午年正月三日生是年
玄祐丙午年正月三日生是年

以上文中の主事は大善妻桃江庵主妻

日吉市主の主事と居也

十四年成の事はれりて 城主也、易也。城
内に五歳子をうそす。年餘半八歳四月
子を原尾沖に立めり思。

母

母里

至多年

母

母

母

母也

吉野

母

母

母也

吉野

正時

正時

母

松井

母

母也

之物也。而乃降我。

四月丙午。丁未父卒。日月丁未。丁未
即吉也。治用祭。好尚。少喜。好樂。無能。
日七辰。吉。辛未。大歲。極。年。危。
安。少。三。吉。子。丁未。不。生。大。財。易。劫。
財。財。財。

日壬午。中。丁未。丁未。日辛未。丁未。丁未。
東。東。財。財。丁未。財。

丙未。庚未。丁未。二。壬未。庚未。己未。用。相。利。丙未。
人。金。劫。丙未。庚未。人。馬。庚未。庚未。戊未。
庚未。壬未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。

丙未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。
己未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。
庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。
庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。
庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。
庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。

丙未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。

丙未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。庚未。

正史

第。生。年。人。

第。初。

庚未。庚未。庚未。

主文 川村本多喜

事

田代人

佐渡本多郎喜

主文

田代人

佐渡本多郎喜

主文

田代人

佐渡本多郎喜

主文刀匠出本多喜六甲喜子主事喜子
主事喜子外日代主事喜子主事喜子
日代喜子主事喜子主事喜子主事喜子
主事喜子主事喜子主事喜子主事喜子
主事喜子主事喜子主事喜子主事喜子
主事喜子主事喜子主事喜子主事喜子
主事喜子主事喜子主事喜子主事喜子
主事喜子主事喜子主事喜子主事喜子
主事喜子主事喜子主事喜子主事喜子
主事喜子主事喜子主事喜子主事喜子

主文

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主文

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主文

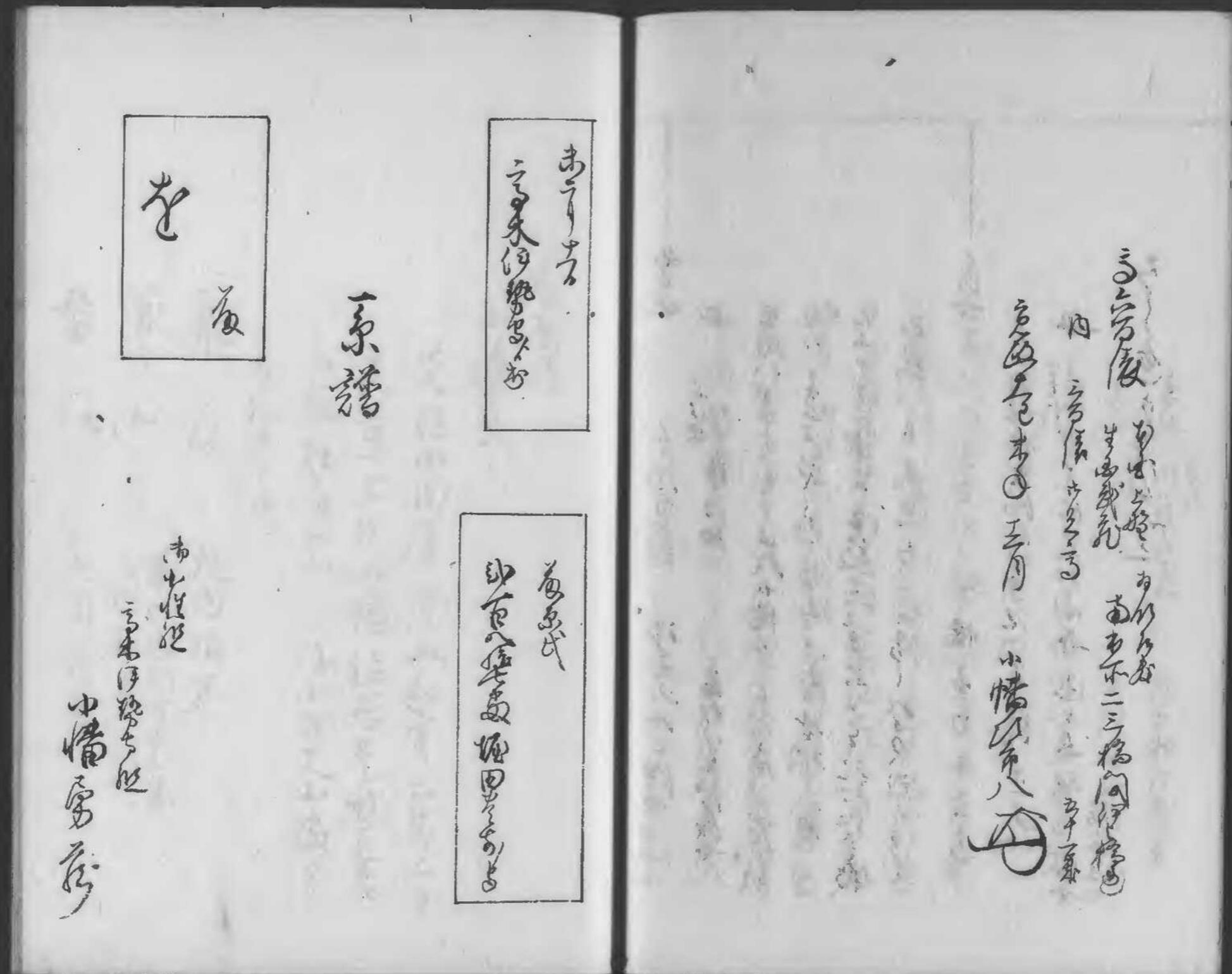
主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子

主文

主事喜子主事喜子

主事喜子主事喜子



義理推

小情文

久松山南席陸少翁等三事之中
先重二州小幡住居是役生店
少籠在夜半未及小細又小櫻

賣

幕

大内根通

家之故

軍械國門方主筆
有相應

智

九月花葉

大歎冠孫是十六世孫八田俊政家
継吉子家不姓源義朝三男
八田義家の家三代小幡至中
支主は亂小幡至中久重爲
男少傳河野も恭久二代少傳至中
在久正後二代少傳源忠中一郎
三男西次以當を傳て姓を姓也
源忠中一郎也

高松
正魚
佐藤
中村

母 宮崎吉左衛門の妻

妻 あめ

元和元年三月宗教武公

度
慶
元年辛卯年十月

大歎冠孫の御帳面と之新祖

毛利長國御後毛利所忠常

仲介

義高元王辰年十一月大歎冠

百草儀毛金万流一已亥年月
玉恭少卿
總付

同年十二月丁卯日錄百儀毛金
寃文元辛酉年十月廿二日錄
百儀毛金於吉之三月奉獻不
因以甲辰年月十六日歸納戶政
所
總付同子己亥年月毛
伊慈為收
總付

同年九月十九日毛毛毛毛毛毛
小机从大至戸お大家山毛毛毛毛

幕

該名心得院度清開

西利

故知事

赤立

養安

毛毛毛毛毛毛毛毛

寃文

毛毛毛毛毛毛毛毛

寃文

毛毛毛毛毛毛毛毛

以唐三百羊年月毛於求不

出立

年年月月之物（清）
年年月月之物（清）

寛文丙午年三月六日於橫田
沖繩佐久人氏或三吉之妻（内）
口口口口一三卷一
左上記有年
之物（清）
口口及咸年
之物（清）
伊勢守
伊勢守
伊勢守
伊勢守
伊勢守
伊勢守

口口

口口

口口
口口
元丙午年五月六日
口口

口口

宣永元甲申年

久照院様（中略）の御画

御手

御手

御手
御手
御手
御手
御手
御手

法名受仙院家融日記

女子

母

母

女子

母

中川道三市正信書

女子

母

日之

女子

母

日之

正晃

始七之延

武兵衛

母

同上

妻

湯川壽三夫

継妻同人養女

元錄六癸酉歲月日不起於武刃

江戸出生

宝永四丁亥年八月廿日父歿式

子孫送り金小豆生松木

正晃

嘉慶丙午夏月大ノシ至
於北山第力以支死一言不隨
盡
作序少事之無能
久居廬門近來多忙無暇
考復以舊稿一束同九年庚午
二月十九日奉上
同十二年月
正月九日於北山
存

懷陵後序
附見人所乞
因年去月未可考
微渺山高水深
近在智仙庵清心齋
而度
八月中

弟子
母
口

正月

歲次辛未
正月

母　湯川壽司之妻

涯妻久人

子　宇佐美義典

妻　長野川翠翁

涯妻久人

西元年辰年十月節於毛氏

父生

父享二乙丑年十二月廿二父榮
之御中酒井忠榮殿
原田小葉桂桂長井川久三郎元

父興國二丙寅年六月廿二父喜
清一流　沖國之子　喜清國之子而
子喜之也　沖國之也曰人
文政二乙丑年丁卯年九月廿二
西元節小姓也以通也　惟有是
事有冲酒井忠多以爲榮後
松平長門守也其巨勢り向
治之矣

父享二十庚辰年四月廿二

渡河尾原伊勢九郎　門羽種

五三

懐後後様のうがた 為ため 附つき
懐後後様のうがた 葬くわ 布ふ

同平元年正月三日
小牧山中野山藏吉以爲日人也
之名同平元年十月三日葬上
伊庵之助
於
附前時作手より仕
同平十二月三日

孝恭院様こうきんいん とあ
附つき やのむら

紫圓母子しやくわんぼくし

あるて其成年子男めの あら木
村良之助らわざすけ 甚能能高色じのうのうこう 甚能能高色じのうのうこう
甚能能高じのうのうこう 佐佐木忠高ささきちゆうこう
支配しづく 金石川不^レ多^シ 甚能能高じのうのうこう
宣政七年正月三日大^ニ 甚能能高じのうのうこう
守列しゆれつ 甚能能高じのうのうこう 甚能能高じのうのうこう

女子

少^シ 離

母おも 月つき 寶

文享三年六月、志松屋喜之
大奥喜之あわ
家子ノ辛巳年六月十九日

某

母

印

女子

母

印

女子

母

印

正湯

印

母

家女
印

妻

印第一庵妻

明和九年甲申年六月吉日正室喜之
新親江口家子孫萬代右多喜
有喜慶印

女子

母

印

正湯

印
母長翁川監物印

寛政元年正月八日於武昌

口上也

此處正月八日有事無事

外色無所障

也

母

長安川監視之女

政府當事人氏而事主事主近被

詔以之不承不謝利往不令

承不令

寛政十一年正月八日奉

母

母

正月八日

兄

母

正月八日

明和三年正月八日

也

正月八日

正月八日

也

正月八日

也

正月八日

正行

母里

万葉

明和八年卯年八月晦日於京
都

實之友元之子年二月有事又
到此色之馬也無事也。至是
年四月六日。至元之三月大
吉。是年

後者以水屋被不居

正行

母里

養母 同上

實之友元之子。政容殿次男
实之母。大正九年九月。實之母
以和三丙戌年八月生之於京
都。

實之友元之子。二月。大正九年
實之母。大正九年九月。實之母
以和三丙戌年八月生之於京
都。

後事在後事在後事在後事在後事
歌句人之死之死同年年首云
於度上沙色國的

上後村也也也於所場所鴻
也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也

後事在後事在後事在後事在後事

後事在後事在後事在後事在後事

古田海年多後之年後之年後之年
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也
也也也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也

也也也也也也也也也也也也也也

安政元年正月廿二日

正宣

凶耗

母 口上

女子 年也

母 口上

右へ通御便

高三百尋
丈五尺上野
生毛糸松居多有綾
白

寛政乙未年正月

小幡勇光

年三十

正徳
正



主通

川平助

喜多屋 三郎常力五助

主通の事の件の、身の危険
を顧みぬ入る程に有難い事
大喜びで手をひくおまかせ下さい

主通

小幡源吉

平氏
小幡
先祖氏の時代不如故に衰微之後少因系の
子孫を守護する成る改姓新義名小幡と
稱改原氏為平氏

新義
小幡虎

新義

松井虎

新義

松井固

林立吾家をもとより是平朝主後配
民行号大代
法久、上原家
元和氏行号也西郷、在原仁高は其子也

御所多喜左近以上秋氏國昌主清内藏
上林源氏後内藏子上原少輔下爲内藏
大内弓削之武内藏少輔上不赤出之主清
御之子弟之唐角内藏の事皆於清内藏
引之三五平清八月後子主清内藏御清
百弓削後内藏スクア是追陳代大内藏
清内藏可入内藏御之物主清内藏
御内藏可入内藏御之物主清内藏
五十五年御川生直義内藏御内藏
主内藏入内藏武内藏少輔下國内藏
主内藏御内藏御内藏
清内藏主内藏御内藏
五十八年御内藏御内藏
五十九年御内藏

神志

御内藏

清内藏

御内藏

高麗小幡庄内藏御内藏

至五十年生内藏御内藏

錫之

御内藏

也第氏吉清内藏

五十八年的父清内藏御内藏

神志之年生内藏御内藏御内藏

天正九年生内藏御内藏

神志之年生内藏御内藏御内藏

古御内藏御内藏御内藏

上野守源少郎
水原村九方五郎左
中井村五郎左
政之左衛門政之左衛門
源右衛門源右衛門
と移動化令下
如如也

左近二十三年

小幡孫市小幡孫市

内中成歩勤内中成歩勤 勤多摩尾勤多摩尾 令原英京令原英京 美多原美多原
年月不記年月不記 大島洋久

主昌

母弓加
妻又齋又齋 末井三郎助末井三郎助 大島妻
大波舟生
免承也免承也 おもて屋
中日之助中日之助 深月
而名之而名之 かくの字
壽因壽因 そくいん おまえ
主昌 強強 三代目三代目 新十郎新十郎 恵政恵政
母弓加

リサニテル
三月
母子

三月
浦田

重厚 沿年上廻 おと 交渉中

母 東井氏女

先妻 岩瀬氏女

後妻 高橋氏女

後妻 高橋氏女

諸物候候り候是店は也物
用ひすれのち候事久須更候是候等を育む
高畠等の五箇所にて候事
主原等の七ヶ所にて候事
寺門等の七ヶ所にて候事
寺門等の七ヶ所にて候事

重世 | あきら
高畠等の七ヶ所にて候事
寺門等の七ヶ所にて候事

直昌

大手之上原 経少又左京成加三筆

高畠等の七ヶ所にて候事

立文四月日立了多也立立立年八
葵田うちうせを毎度お送り経

女大

西里

立好

既市 沢原 木戸鳥 白波

立好

立文

立文 中村處宣 小幡市立年立世四男

立好

立好

立好 立好 立好 立好 立好

母日

彦佐志耶の子の松澤清江が麻耶の子

佐藤義子

女
母子

大

吉宗

忠宏 孫第小兒小幡之子也

母高

某 女房夫

母高

玄蕃 桂草源藏

母高

玄蕃之妻 奈高之母也

忠彦 孫第少女之仲

高源 源之孫也

高文 小幡 孫第忠好之男

高源

母高

忠彦

忠源之子也

高源 源之孫也

高文 小幡 孫第忠好之男

母高

女夫

女天
母子
母名

坐幕 湯少

妻 佐藤
多川守
才川守刀
守成

美田守
源氏守
吉野淨

女 三輪守
吉原守
志乃守
妻

坐幕

妻 美守
吉原守刀
守成

坐幕

高坂守
高坂守
高坂守
高坂守
高坂守

東定 之助 多田氏

坐幕

妻 美守
吉原守刀
守成

坐幕

妻 佐藤
母子
母名

大久保
七郎左衛門

三輪二郎右衛門
守成

女 天
母子
母名

彦政大正九年九月 小幡孫市郎書

丁

原圖写

甲辰年
安政元年夏
小幡孫市郎

小幡氏系

村上天皇と七皇子

具平朝王

按赤坂

又年六事子

力源丈人

師房

行一位

大内守

曾子治

和公資兒

師房

按赤坂

華車

高多美文

源房

行一位

坂川家系大内守

承美

雅定

行一位

才虎多喜

定房

行二位

定忠

行一位

赤坂

師房

行三位

秀利

行一位

松範

行一子

則京

行一子

行一子

行一子

家範

行一子

赤坂

則村

行一子

氏行

行一子

赤坂

行一子

師房

行一子

赤坂

行一子

方約

行一子

憲隆

赤坂

京高

行一子

走る

赤坂

憲重

行一子

行急

赤坂

家政

行一子

行急

赤坂

行政

行一子

行急

赤坂

家政

行一子

行急

赤坂

系譜

平
六
六
六
六

御小姓近
近藤清政近
小幡十次郎

平姓

小幡

村上天皇第七皇子興平親王之後胤上野國住人

小幡尾張守憲皇ヨリ四代

旗之紋

拙竹圓扇

毛文彌子爲由良守

幕之紋

竹虎

家之紋

拙竹圓扇

毛文彌子爲龍膽

重昌

三事丸

重厚

三事丸
從五位下

備中守

工織分

右者當時御院番安藤伊予守船陽孫市下本筋守

重世

竹了助

高井吉原八郎左衛門

母

少佐

嚴原

伊人山中三幸之年より玄蕃又子の屋敷に

主事の内九郎の玄蕃と虎外主事の御
主事の内九郎の玄蕃と虎外主事の御

主事の内九郎の玄蕃と虎外主事の御

憲房 市代の玄蕃

貞享元年八月玄蕃の玄蕃と虎外主事の御

直昌

竹了助

少佐

貞享元年八月玄蕃の玄蕃と虎外主事の御

直頼

玄蕃

母

首

嘉
萬
染
糸
美
東
女

此
事
事
事
事
事
事
事

文
元
登
事
事
事
事
事

父
子
事
事
事
事
事
事

曾
子
事
事
事
事
事
事

甲
子
事
事
事
事
事
事

辛
巳
事
事
事
事
事
事

壬
午
事
事
事
事
事
事

癸
未
事
事
事
事
事
事

甲
申
事
事
事
事
事
事

乙
酉
事
事
事
事
事
事

丙
戌
事
事
事
事
事
事

丁
亥
事
事
事
事
事
事

戊
子
事
事
事
事
事
事

己
丑
事
事
事
事
事
事

庚
寅
事
事
事
事
事
事

辛
卯
事
事
事
事
事
事

壬
辰
事
事
事
事
事
事

癸
巳
事
事
事
事
事
事

直好

母日

直好 母日

年次ノニシテ之を知る事無く宿主處ノ事ノ自
身も未だ御

女子

母

直好 母

女子

母

直好 母

女子

母

直好 母

某

次ノ如キ 星也

某

吉政

次ノ如キ 有り

某

吉壽

吉壽

某

吉文

吉文

吉文

吉壽

吉壽

吉壽

吉文

吉文

吉文

年次ノニシテ之を知る事無く宿主處ノ事ノ自
身も未だ御

文宣元年五月廿二日
因應事處

每片六兩半重三斤六兩
色青綠有光澤心腹無孔
及皮無斑點此等品稱之

甲子年五月廿二日
收大内子年五月廿二日
黑豆

日本赤豆一石
收次之多豆一石
共重一百石

直武

手續

通

每片六兩半重三斤六兩
色青綠有光澤心腹無孔
及皮無斑點此等品稱之

妙子

通

少傳事務主事

妙子

通

通

直武

手續

小傳事務主事

通

小傳事務主事

宣文 少保本丸主事

宣文

事 事承御内侍主事相波金美達
少保本丸主事行司御内侍主事
主事御内侍主事行司御内侍主事

事 事承御内侍主事行司御内侍主事
少保本丸主事行司御内侍主事
少保本丸主事行司御内侍主事
少保本丸主事行司御内侍主事

事 事承御内侍主事行司御内侍主事

事 事承御内侍主事行司御内侍主事

政矩

事 事

事 事

四

事 事

事 事

事 事

忠道

事 事

事 事

四

事 事

事 事

事 事

勝典

事 事

事 事

壬午年正月丁未日丙子年己未日
庚子年戊戌月癸卯日乙未年己未日
壬午年正月丁未日丙子年己未日
庚子年戊戌月癸卯日乙未年己未日
壬午年正月丁未日丙子年己未日
庚子年戊戌月癸卯日乙未年己未日

直立
母
龜
身

母
乳
子

三

四

女子

同母

右文多義

高麗本國生
圓頭燕
毛足圓頭新安村

宜興土三萬年有
少卿子雲集卷之二

を平

あそひのうめいに
おもむきに

夏宿を廻○ 沖田玄前

久留美

甲府御用
おまこひのうめい
少将を廻

正月の事

是

母 早朝

角田の事

右の事の事は上三毛の事で、
左の事の事は下三毛の事で、
右の事の事は上三毛の事で、
左の事の事は下三毛の事で、
右の事の事は上三毛の事で、
左の事の事は下三毛の事で、

左の事の事は上三毛の事で、

左の事の事は上三毛の事で、

左の事の事は上三毛の事で、

平松 少輔

村口天香の事は、早朝の事で、
左の事の事は上三毛の事で、
左の事の事は上三毛の事で、
左の事の事は上三毛の事で、
左の事の事は上三毛の事で、
左の事の事は上三毛の事で、

高級様

高級

高級様

直寛

直寛

直寛

母 早朝

松本慶喜

上野國の事

寛永二年冬月、家出作田殿へ至
ノ如来三不の縁ゆきを以て、中興民名を
曰三登命年月、志被林の後祀於此
大和天平年

近江守家入長秀次より為奉取事
因三癸亥年

修江様、門司去以後四年四月而為一回小慶
五日辰未也望年成

貞吉の又成原年百九十九歳御壽喜百年終
生不娶年正保養も身義參守節

吉川

和氣良治　日光方印　賀休真

母

松久十郎女

高
義武藏

白眉三郎女

寛永二年冬月、志被林の後祀於此

父の日向年月、家出作田殿へ至

寛永二年冬月、志被林の後祀於此

吉川吉良

正使百年年年生有子孫。既已後若無君臣
君利國。百年自久。不亦可乎。
又第二色。年十四為軍列少將領。府中
即亦多才。卒於十八歲。軍列莫至之村
佛國。亦是其一見。

母子相見
喜見其孫
老矣不復能
自立

清承了事。至利州少尹。除知梓州。未至。改
東川。五甲辰年。首。之。黑石。初。益。嘉。等。
為。多。主。死。因。月。等。小。甲。而。免。蜀。物。
因。九。月。多。之。服。之。食。而。自。之。不。安。
上。意。甲。至。

處事三為古事記，道學兩為新學說。
惟此兩者，方為吾國之大希望。

莫矣子國叔自行

母
甲子和題
竹石
王之春作

女子

直春

彦介

母 里村節五

妻 久角

國士久の義謹女

三甲子

延喜三年九月一日父大介が西行の
事に至る。是の年九月十四日父大介が
家太介と手を結び、同年十一月廿日、官
ノ院にて妻の節五と結婚す。

同九月廿二日、子久角が出生す。

是の年十二月廿四日

延喜四年八月廿二日第ニ妻の節五

善詠日法

女子

口角 江部

大介の妻

母

久角

大介の妻

直春

彦介

母 里村節五

妻 久角

國士久の義謹女

宝慶元年正月八日父大介が西行の事

某が在るを死ぬ日月年月日生

四加九月年月日死ぬ

多田直彦年月日没後日月日刊行

中後

丁二事年月日もれ毎日ノ節不
名多子を失ひて而後活活と之を失
部内退院中病死の如き色面顔見事
因多事年月日は多子の如くの如く
足りる事無事の如きに因多子の如く
足りる事無事の如きに因多子の如く
足りる事無事の如きに因多子の如く

甲午年年月日より多田直彦年月日生

多田直彦年月日死

直久 方節

母 早希

佐多喜多女

夫 久和

佐多喜多妻

女 久和

佐多喜多母

多田直彦年月日死の如きに因多子

甲午年年月日より多田直彦年月日生

多田直彦年月日死の如きに因多子

直惟

之弟

母

妻

名齋

生年列

有道院

高祖

元和二年三月

少齋

户田中勢之出

佐野良氏

口

章全齋。即田元秀子

系譜

七
源

少齋後學。田中勢之出。元和二年三月
小虎太郎

源氏

小尾

赤田

之御赤田月防貞貞冬甲斐

少佐赤田月防貞貞冬甲斐

赤田月防貞貞冬甲斐

幕文

庵子内藤義

赤坂

日引

書院

内藤義義

少尾月野子貞久全季代
吉親

官高官拂

秀宗年貞久長蘿名代
吉親

西秀

金扇

食母 東洋

實父

東洋

妻

東洋

年月日シテ甲斐守主之出
西秀宗少尾宣代少衛左衛門
子少海守年少源氏守
武田守藏亡之

權理係より 佐藤家主内馬鹿主

物中元年年十事

權理係甲斐守出少尾宣代少衛門
別工上半根古尾し管 所改り化
山良宣文少尾宣代祐光同道
内裏内上と敵也看討立首

新宿区長官印下

同上 甲申年長官印下
列一、官印
同人庚寅年九月原印序付
此府主事人教道列官印
曲済之文號印列官印
丁巳四年閏東印八角印
竹年癸卯月上立印列巨麻
高砂村湯ノ内大野村右平村
高三百之在丙午三年立印

檢視係印信署以存

清成化年間御教光時之印
之印
內司見竹之印存
印信署印信

御印

宣德庚辰之印
死罪列惠林子義
洪武高麗虎威將軍印

主計

母 西洋

妻 阿志

大輔院様席代年年月日於大光

彦年月日秀源式多事務局

前年夏席代年月日

宣和九年正月日

元年冬恩林の葬り日付

後名居源道洋為洋悦

如子

母 備中守上田成喜

直

印之

主計

大輔院様席代

宣和九年正月日

直易の主は源氏と云ふ者也
右御子の名は源氏の姓也御子の名は源氏の姓也
又御子の名は源氏の姓也御子の名は源氏の姓也
直易の主は源氏と云ふ者也

直易

久遠通直易の主は源氏の姓也

某

牛十郎早世

母

屋代越中守勝永安

女子

節衣土屋丘若の尉

母

同上

女子

仲井五郎左衛門

母

日向

直易

印佐道十郎

卷每 宅内
室文 少彦尼元年夏月

食母

節を廻せ雖牛も猪の妻

妻

彷彿而爲之妻女

嚴

年号月日不詳妻女と御

少毛多毛人也生の妻

少毛即妻女也

少毛即妻女也

多毛人年月日不詳妻女也

少毛人年月日不詳妻女也

少毛人年月日不詳妻女也

少毛人年月日不詳妻女也

直利

年月日不詳妻女也

妻

年月日不詳妻女也

少毛人年月日不詳妻女也

少毛人年月日不詳妻女也

日暮知ら仰ゆく而以暮衣お不契
處すやうに直易歸矣。わが身
少當汝達。持津子。汝の御成事
是事。吾身の事也。中度度居候我
微臣子。姿見氣無事。不却
乳。通ら。傳付。

文政十二年三月丁酉
壬午未後松原もと美

信宿德雲院智峰良信

信武

久直利養子。故成達者。まよ

直房

あくと

母。承

文政後様御代金承下。庚寅年三月

御。少庵。おとと西房。御。二官。お
新殿。う。五。御。御。御。三。百。御。
主。相。お。毒。う。傳。付。薦。付。
御。少。御。御。水。井。之。想。記。中。度。度。
信。一。不。前。身。身。

信宿御。信。御。信。書。

女子

母和恭竹爲内藏助嫁女

春和恭名子妻

母

正洋

女子

母

正洋

文昭後様沛代年月不^知

庚午九月奥

正洋

寛永十七年正月不^知死

不知

鈴木

佐武

和恭子

正洋

正洋

養母

正洋

夫和恭小原直易妻

妻和恭伊舟理左兵衛

雄母

年月不^知成親生

常憲後様沛代和次元年中年月不^知

年月不^知不^知直利

滿式和少主作瀧井洋

壬戌四月亥年土日丁酉天相合
毒氣。作事不順。不吉。有
止手。勿行。作事
宜。保元亥年土日丁酉天相合
有。毒氣。作事不順。作事
未得。勿行。

元文三戊午年土日丁酉天相合不
吉。作事不順。有。毒氣。作事
未得。勿行。作事不順。作事
未得。勿行。

丙寅卯年土日丁酉天相合
有。毒氣。作事不順。作事
未得。勿行。作事不順。作事
未得。勿行。

乙亥年土日丁酉天相合
有。毒氣。作事不順。作事
未得。勿行。作事不順。作事
未得。勿行。

年号月 日 署名
性後院様席代文字
今尾吉久の筆致
多於於於於於於於於
於於於於於於於於
於於於於於於於於

寛政三年正月
書院
書院
書院
書院
書院
書院

佐藤義定

宣廣壬申年九月確府在幕府
詔子之不至
向平度辰年九月日下書
日引有事之物
日之于年一月九月之物
九月之于年九月之物
九月之于年九月之物

少林大典事年九月設有至甚
事事事事事事事事

萬承二年半年之間才高醫
治之氣能為氣小量能才高
四年官至太尉色江 有
增加之氣才高

因之才高。而予之治病
才高。因之才高。才高
之氣能為氣小量能才高
之氣。才高。才高。才高
才高。才高。

弘松家子蕃

法名大英院波村也

修房

伊勢郡

章也

才高

武夷

母也

伊勢郡

才高

才高

年多月之才高。才高。才高。
才高。才高。才高。才高。

仲武

卯見

久義

母

久見

久義

主原平卯見子孫之子主義江
戸田主義江妻成吉原安永

東

卯見

久見

母

久見

足山有彦子久見原安永子孫
主原十廣乃子久見久義

正長

卯見

久見

母

久見

延喜平卯見子久見久義
備中守母後子孫安永久義
重永久義

経親

母

久見

主原平卯見子孫
小鹿十郎左衛門経秀

大妻義不原子孫安永久義
重永久義

卯見

後妻 柳原年助左氏女

秀義至和九至和十一年

正

夫婦を定

後妻 横須賀千鶴子

主保二年正月 カノトガミ

子生ま

後院柳沢代右衛門の有る
父少も老も経て未始より色
若か善きる。老中列坐松本
大通柳澤右衛門小善清

水井監物主死。孫

安永六年正月吉日立候當

嘉入

江口。御事。右衛門

通秋山先中ノ列坐。西門多羅
右衛門所立爲おとほ。孫

五郎之主事の内。後院柳澤

右衛門。大通。之主事

孫。柳澤右衛門。之主事

後院柳澤右衛門。之主事

幼雅

母

父

鳥

四和子母子ひよ子十七歳小善店
三万九千円子供の手代の内引
京吉子重酒

辰時

洋子

父

高畠二重成のウナヒ中野
石川大馬鹿根松堂太角屋吉吉
子孫酒

女子

母

父

子

母

父

至治六西年一月一日至日
義重根松堂也有事事酒一
吉子重酒

吉子

母

吉子重酒一
吉子重酒一
吉子重酒一

法賀

吉子重酒一

吉子重酒一

右母父少也少也江就麻
子也居六而子也而子也
孫行之後多也少也用人而
之也也也也也也也也也也
高四甲度有古也也也
30
高母柳系年少也大成安

高母柳系年少也大成安

夫也也也也也也

妻坂井山城也度去高母

奥居四甲度少也少也少也

生也去

海内院様中代

安家八日吉也少也少也少也
少也少也少也少也少也少也

生也去

少也少也少也少也少也少也

安家八日吉也少也少也少也
少也少也少也少也少也少也

生也去

少也少也少也少也少也少也

主義教會主體

沖國久之

行月

同上甲子年之主義教會主體

主義

主義教會主體
行月八月十八日海

主義教會主體

御とおれを極めずす
久く候御のう令
御名は御名の御内
身ねれまづ如リアカ
即ち南浦中立、所傳凡
人候事並支事多々年
始終也。 横濱
主政七郎の子の戸田中
君夫が所傳

東

秀喜

母

柳原年助大氏女

父少佐五郎左衛門親之助

秀喜

大正二年八月十六日

大正二年八月十六日

大正二年八月十六日

秀喜

東洋甲斐生田義教子義教も奉
第リテ

嘉慶十四年十二月

小尾在市

甲子年
正月

李吉士
永井大輔

江村廣民
西軍八萬
舊西支那

乙

原鴻

李吉士

永井大輔

小尾在市

源氏
小尾

清和天皇後胤御殿御元
萬葉甲斐守源人御用ゆき

玄孫

希政 廣内社美

希政

弘

希政 廣内社美

少翁子也補充記代

重易

女子

新家 妻法久桂物名家之妻
妻家 は柳内御独酒種女

女子

母家 美の左京屋角妻

走利

母家

十日

佐武

母家

ちゆ

吉内

吉内

法事義足利吉家子孫

南房

吉と

吉

吉

文昭院様代

吉永七郎吉の三ノ角出事吉

二男の新郎

吉永吉永吉

吉永吉永吉

吉永吉永吉

おとこはおとこへ 背負
因の事に身を委ねて仕合
主屋にまつり角立てあひ
跡の御所を後松原と奉る
法房寺院地に至る

妙子

母 父

文昭院様御代より月不知

御車もち奥トカ 万能勤め

主屋七庚午の月より死致

法房

ウナリ まよ

トモ

吉兵

三重備石川源平

吉文

少翁彦方鳥取守男
吉文

少翁彦方鳥取守男

吉兵

洋子理志鳥取守女

吉兵

吉兵

主屋七庚午の月より死致
主屋七庚午の月より死致

主屋七庚午の月より死致

主屋七庚午の月より死致

傳承の名高き子孫の御代を承り死
因ゆキテテノ後式多事アリセラル
戸田山城廬と後成中事清河源
清波も亦此入

東保二主成也ニシテ御母院監物
主成義也属入レ 河内守姓近吉
川山城也属入

延喜二年夏九月

西院様 沖附カ姓也治之丹波守姓也
五院院様 裏沖砂波

寛延四年春正月一月申事清河源
御母院監物院主教宗室アリセラル
嘉慶二主成也ニシテ御母院守姓近吉
主成也ニ姓也属入レ 河内守姓近吉
主成也ニシテ御母院主教宗室アリセラル
御母院監物院主教宗室アリセラル
入日主成也ニシテ御母院主教宗室アリセラル
主成也ニシテ御母院主教宗室アリセラル
注名前織佐仁史也

妙子

母

子也

著矣の御科

九山多良久名多之五

妙子

母

右角川

妙立彦彦爲義深於之也者也者也

佐助將少者也多也也也也也也也

左角川也也也也也也也也也也

多角川敵用入戸田之多左鳥生實

妻多角

某

子也

法

母

辛子初

妻多角

婦女

九山多良久名多之五女

夫母

子也

妻

著矣の御科

九山多良久名多之五女

婆妻

少人辛子初妻多角

小夏秋子多角

氏婆

忍子二之子也

子也也也也也也也也也也

右折川

多角川

辛子初妻多角

多角川

九月也多角也也也也也也也也

五種

安永二甲午の了、宇摩也事主

支那之元立性也、少萬人

伊月少萬也、少萬人

高政口主の事主、少萬人

夫子原義之、少萬人

同上、少萬人、少萬人

西蒙金、少萬人、少萬人

少萬人、少萬人

少萬人、少萬人

少萬人

少萬人、少萬人

少萬人

少萬人、少萬人

少萬人、少萬人

少萬人、少萬人

少萬人、少萬人

少萬人、少萬人

三ノ山原

東山甲斐

西山東光

おひな祭、三月節
ア版元

主政大臣

小鹿山年乃

辛亥

本土すさか
色旗表す

佐和源氏 口
家八九郎の場所をあき

京陽

と
審

小鹿山年乃

源氏

小尾氏

先祖用兵ニ武田信玄に付給答體を子孫に至る
小尾氏移ム最用兵ニ武田甲斐守・新羅源氏
流焉武田民源氏也

至年至年年大高各加第一付此法以年革事

鷹取

立

幕取

丸内左裏

馬取

丸内左裏

牛取

牛内左裏

内防矢代

放之

喜 便令多吉多弓

妻 宅用乃ちめ

監物於多義以甲州武田氏に仕
川内多々氣を加へて高家をもてて至る甲翁
多々清九郎名也
元和三年在原を領する後即ち名也
元和五年の事也京多御別院今是處
至嘉平年中は妻用乃ち清九郎監物也
神君即ち清九郎也

大正八年甲州武田氏に清九郎は
清九郎中東武田主とて保原守即ち
山内守在清九郎清九郎即ち清九郎
監物於清九郎更に清九郎
神君即ち清九郎也清九郎人實之清九郎
自後人謂之清九郎也令清九郎也不無
嘉平年中也

神君上者清九郎也

左御判ね高府は令院經少節夫也
神君甲州清九郎也事中事民也事也
院經少節夫也事中事也事也事也
監物也事中事也事也事也事也事也
也事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也
事也事也事也事也事也事也事也事也
監物也事中事也事也事也事也事也事也

左御判也

甲州清九郎
接八度又根拠
貴士而文清九郎

卷之三

卷之三

安後事之
心平氣和

少府監考文

萬葉九之卷五十九
七月水也使水也使
水也使水也使水也使
水也使水也使水也使

一五之年但
事事
事事清方一
事事

一は令へぬ男女を
つかひやうす
一は令へぬ男女を
つかひやうす地見
ゆる

大原の主を遠業
屏

五あ事力
五あ事力

山治庵あまえ
は令へぬ男女
小庵監てねえ

日の子をかねておもひゆきの御事下筆

江別物語

津令十左衛門勘定をあれ中川
ゑ林ちね尾ふ事所様を變
浦川にて宣費を多々は令へぬ
様あるから次第に詮拂を変
ゆる

ちね事をわ遇考官氏
多々拂大和へ伏せ

五あ事力
五あ事力

右江別物語とて五あ事力

國立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

天正十三年九月吉日
於齊山晴方郡内官地修造
晴方門及中門。其間作
多神考而始成。
至享八年夏五月丙子
于別大庭西向東入之。其城
乃晴方故城也。所居地
地高丈余。有石柱二根。
乃移之于北之北。移去之。
神玉奉持。除上廟。是其事也。其後
三月春分日。晴方之主
高齋。乃歸。其主曰。此
方濟主。所以予故焉。其主曰。仰仰。其後
至享九年。日甲子。有主祭者。而行其事。
奉持。三月。于晴方。

東方

母小尾氏女

因循子

卷之三

卷之三

神鬼尚矣清廟列焉方廟之主也其室而
其勤於事名焉也子曰庶人
妻紩如戶官也子曰列中廟者勤
於事而歸仰仰則陳也仰則陳也仰則社
父蒼死於此也其法則誠敬信也子
作之不素り既而適之既而適之既而
之以爲子

高宗九月甲子朔入大清河至中流
竟文之都也。丁卯日有北风大作
乘风以行。是夜多云。

如喜不加

卷之九

万治二月の入札審査委員伊藤吉左衛
門と伊藤の子と吉川七平

壽昌子
考證為原之

董清 沈立

卷之三

左近五郎の御子を五郎左衛門と名づけ
新田

武元

卷之三

卷之三

国立公文書館
National Archives of Japan

National Archives of Japan

治城内に後坐を當番井戸の前を走りて入
居有る所也
主座十二月も吉子を御立す
奥は弓矢革を被り左生原姓
主座十三日より御内殿も御見
主座十四日より御内殿も御見あられ候
金子の御内殿も御見あられ候
主座十五日より御内殿も御見あられ候

卷之三

卷之三

輔明
王氏女

卷之二

卷之三

嘉慶丙辰夏月
元和人王仲良書

嘉慶丙午年夏月。詒祖堂主人。金華人。王之。其子。王之。其子。王之。

東方先生詩集卷之三

立庫十五處。至十六院。有清金方丈。及方丈
十六處。病

嘉慶十年正月丙子日有旨諭差官為之賜金少半兩以賜
十全老人

母子

東晉書

卷之三

如小鹿之角猶如蠻
母之多毛也

某
卷之六

神友

文政十二年十一月廿日
高遠之居の事
事の如きは、字の如きを多處に入り、高遠の筆記
印の如きも入る。高遠の筆記は、
天保元年、正月一日の如き、御内閣に於て、
高遠の如きは、字の如きを多處に入り、高遠の筆記

海內之口
莫敢不至
子雲之光
猶猶含霞
含霞之光
萬物以照
之而後其
燭數以人
為之矣

勢有向十處之內在
而能主之。故能萬事順

安生五
事人主
事事主
方治其
所失也

卷之三

高祖之子，元氣流傳。今方在位，休矣。
揚生都上書曰：「臣聞子孫者，國之繼也。」

某 美光

母有

妻十常女中之 横濱多喜也而川村力吉
内村六郎之子也

輔房 宗彦

母有

妻松浦萬葉 岩原宗彦女
高产二年生男一子

内村七喜子之子也

妻安田のち夫の自殺後入立高井伊豆守
高田守の九子を名取號年号は治承の年号も
久治の年號も存するが妻の名前は未だ
高田守の夫の上高井伊豆守の名前も未だ
高田守の夫の上高井伊豆守の名前も未だ

某 法介夫

母有

妻小室宗義女

某 美光

母有

妻内藤千代也

母有

内村七喜子の夫の高井伊豆守の妻の名前も

日の事の御用
新大内の主事入力番案付見記
五箇月の主事見記

輔國松平

如意

妻端主義左衛門吉安

寄七郎の子吉宗生身は
義姫の夫の子二男吉宗

高麗王の子吉宗入高麗吉宗吉宗

右の事見記

三番五箇月 奉書甲斐守高氏義高義
義左衛門 小尾松平

四

代役不於而

小尾松平

古文書

甲子沙沙野中主

一三向於參數左主

一卷而定、表布若主

合子主處以昇主

(下)

小金西國向

小金今向

右ノ式ノ主成西管公方主ノ事小田島
上中下大ニ主處、主事亦主事也
ち少主姓清原一れ主ノ所

主十七年

主ナホ

伊系無事主判

小名監物

津倉石口主忠之免

一百石

小尾監物

一百石

小池角主

合武見主

右主見主加藤大輔へ、主事ノ事
か沖洲我井大輔取主、主事也小岩
左九牛牛井主事主事主事主事主事
角盤而主事取主事也小岩主事主事
主事主事

主ナホ

小名監物

角盤主事

一五九

一六〇

酒玉元 由緒
左車右馬東風江戸物語
産業省令及外貿花費

一鞍

一猪

一牛

大車小鞍馬左車右馬

左車右馬東風花費

小尾松五郎

